

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ミキちゃんと言佐子は小学五年生。四年生の時に転校してきたミキちゃんは級友から距離を置かれるが、言佐子はミキちゃんと心が通い合っている。今二人は、中学のプラスチックバンド部の演奏会が開かれるホールに来ている。言佐子がホールに来たことは、言佐子の母には内緒である。

「この学校の演奏って、ダルかったねえ」

ミキちゃんがそう言う声を聞いて言佐子はわれに返った。糸の切れた操り人形のようなならしなかつた。言佐子はミキちゃんに話しかけていた。言佐子はステージに上がった学校の演奏なんて聞いていなかった。言佐子の耳は演奏に集中せず、洋梨を食べたわけでもないのに、言佐子はピアノになったような気分だった。ミキちゃんはコンクールのプログラムを開いてふむふむと、そのダルの演奏をした学校の名前を確かめていた。そしてまた言った。

「ダメだよ。家にちゃんと言わなくちゃ」

ミキちゃんは言佐子が黙って出て来たことを忘れていなかった。

「ダメだってば、言佐子ちゃんが家に何も言わないで県民ホールに来ちゃったなんてことになつたら、あたしが誘ったからだって言われるかもしれないさ」

「昨日もさ、こんなに遅くなって、と言われなかった？」

「言われた」

言佐子がぼそっと答えた。しようちゃんと有木と川島が玄関まで来てくれたから、「こんなに遅くまで練習していたの？」って言われるだけで済んだけれども、お母さんもって何か言いたそうだった。「もうちょっと遅くなつたら、市民会館まで様子を見に行こうと思つていたところなの」とも言っていた。

「あたしなんかさ、夜、コンビニで買い物していたとか、遅い時間にひとり歩いていたらとかいっている言われているんだから」

そんなことをミキちゃんが言われているなんて言佐子は初耳だった。

「誰が言ったの」

前にも、言佐子はミキちゃんが「ひとりであるのが寂しくないなんてヘンだ」と言われた時、同じことを聞いたのをふっと思い出した。それは青い影のように言佐子の頭の中を通り過ぎた。あの時は言佐子がいくら「誰が言ったの」と尋ねても、ミキちゃんはぜつたいに答えなかった。

「団地のおばさんたちが言っているの知っているもの。クラリネットのレッスンの帰りにコンビニに寄つただけで、小学生がこんな時間に外にいたらだめじゃないって言われたこともあるし、ヘンな目で見られることだつてあるから。でも仕方ないかと思つているけれども、言佐子ちゃんがお家の人に黙っていたら、あたしが悪いって言われるよ。きつと」

「そんなことないもん」

言佐子は珍しくはっきりとした声できつぱりと言つたけれども、ほんとうは「そんなことがあるのかな」と半分信じられないような気持ちだった。きつぱりした声は、言佐子の確信ではなくて、不安を打ち消すためのものだった。ピアノオッドなら鼻がよきよきと伸びる場面かもしれない。「そんなことないもん」というのはウソとは言えないまでも、なんだか心配になつた言佐子の気持ちを隠す言葉だった。会場はだんだん人が増え始めていた。

「そんなことあるもん」

ミキちゃんは言佐子の口まねをした。

「ない」

言佐子も少し意地になつて、ぶつさらばうに言い返した。

その時、

※ ジャン、ジャン、ジャン、ジャン

と、すこぶる緊張した音がホールいっぱいに鳴り響いた。最後のジャンが鳴る前に二人はびつたり口を閉じた。口を閉じたのは言佐子とミキちゃんばかりではない。天井の高い県民ホールに集まった人々が、一斉に息を飲み、耳を澄ました。最初の一言が緊張した空気をあたりに満たした。複雑な音色が渦巻く中を金管楽器の響きが矢のように突き進んで行く。そして黒くて大きな力呼び出すように鳴り渡る。会場の人々とともに音に耳を奪われた言佐子だが、ミキちゃんとのやりとりを急に遮られたので、目だけはちよつとミキちゃんのほうを見た。そこには真剣な顔というだけでなく、あの鏡の中の世界に閉じ込められたようなミキちゃんがいた。澄んだ目で音に耳を傾けているミキちゃんの胸に押し寄せている切なさ言佐子は何と言えはいいのか解らなかつたけれども、大きな波のようなものが押し寄せては返す感じだけはよく解つた。音の渦巻きは、再度、繰り返されたジャン、ジャンの後でより一層強められた音に続いて、クラリネットやフルートの木管楽器の柔らかな音に滑り落ちるように引き取られた。そしてホルンが緩やかに、しかし、張り詰めた音で、高音域へと人々を連れ出す。ホールにいる人はみんな一緒にその音楽を聴いているのに、その胸に波打っているのは、まったく別々の思いだった。その中でもとりわけ、ミキちゃんだけは孤独の表情を深くしていた。曲は低音部の重い響きがぐんぐんと闘いながら前に進む黒い固まりを連想させる勇ましさに変わる。そこではありとあらゆるものがお互いに相争いながら、我さきに前に進むとする勢いとスピード感があり、不意に挿入されるトランペットの響きが緊張感に不安を付け加えた。いやがうえにも過ぎて行く時の流れの激しい表情を打楽器が切れの良い音で表現する。打ち鳴らされる打楽器の重い音の下をクラリネットがすばしっこい鼠のように走り抜けた。

音の渦巻きとともに呼び出された大きな黒い力は、争いの上に争いを重ねながら大きな波になつてミキちゃんの胸に大きな波動を作りだしていた。それはミキちゃんがよく知っているけれども、決して語ることもなければ、また話すことも不可能な経験に、音、いや音楽という形を与えるものだった。

言佐子はそういうミキちゃんを見ていた。ミキちゃんの胸の中を通り過ぎた風を言佐子の瞳は映していた。ミキちゃんの胸の中に吹き荒れた風を言佐子の耳は聞いていた。ミキちゃんが通り過ぎた幾つもの夜を言佐子は傍らで感じていた。ふたりの女の子は一生懸命、演奏に耳を傾けている。相争う音と音はぶつかりながら疾走する。マリimbaは、傷ついてはね飛ばされた誰かの魂が闇に転がりながら消え行くのを告げる。

やがて、木管楽器がゆるやかなテンポに転じて、やさしい和音を奏で始めた。誰もいなくなつてしまつた場所。どこにもあるけれども、どこにもない場所が、あたりにゆつたりと広がる。黒い大きな力、鉄や岩や夜を思わせる音色が、白い昼の音色に変わった。柔らかな木管楽器の和音が密やかに広がって行くように空気の中に広がり、白い雲の音色の中には、小さな魂を悼むような甘い悲しみが隠れていた。一番下で、ティンパニーが静かに拍をとっている。何時いかなる時も、時は流れることをティンパニーは黙々と語つた。そして、木管楽器の和音に唱和して人の声がどこからともなく沸き上がった。さつきまで激しい争いの音を奏でていた金管楽器のメンバーが低い声で歌っていた。楽器の音とは違う人の肉声は過ぎ去り行くものへの深い慰めの声であった。曲全体が高音の方向へ誘われ、はるかな彼方から陽の光が射し来るような広がりを見せる頃には、金管楽器も、音の響きの中に戻っていた。トランペットが控えめに時を告げる。静かにティンパニーが響き始め、やがて高らかに打ち鳴らされた。ありとあらゆる争いも悲しみも不安も、誇り高く轟き渡つたティンパニーの響きに収束して行く。ティンパニーに従えられるかたちで、それぞれの楽器が、この世界が終わる、この世界が閉じられることの名残を奏でながら、まことにひっそりと余韻を残した。指揮者の手がぐるりと輪を描いた。

聴衆が見たこともない世界がそこにある。見たことはなくても、どこかで感じたことがある世界がそこに秩序を与えられ、人間の息を吹き込まれることでそこに存在した。

「すこかつたねえ」

拍手をしながら、ミキちゃんが言つた。さつきまでの神々しいようなミキちゃんではなくて、ふつうのミキちゃんだった。演奏の間、ずっとミキちゃんを見ていた言佐子は、隣に座つていても近づき難いような神々しいミキちゃんはどこに隠れてしまつたのだろうか、返事をするのもできなかつた。深い夜を知っているミキちゃん、深い海の底を知っているミキちゃんが、どうして給食を食べるにミキちゃんや、楡の木に登っているミキちゃんに居れるのか言佐子にはひどく不思議だった。

(中沢けい「うさぎとトランペット」より)

問一 線部①について、言佐子はミキちゃんのどのようなところを「疎ましく」感じたのですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 言佐子と一緒に来ておきながら、言佐子がホールに来たことを心配しているところ

イ 言佐子は静かに聴いて演奏に集中したいのに、横から話しかけてきたところ

ウ 言佐子のことを心配しているふりをして、本当は自分自身の心配をしているところ

エ 言佐子に対して正しいことを助言してくるので、言い返しづらいつつ二十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問二 線部②とは何を指しているか、解答らんにしたがって二十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問三 線部③の具体的な内容はどのようなことか、解答らんにしたがって四十文字以内で説明しなさい。(記号・句読点も一字とする)

問四 線部④について、その説明として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 音楽に反応するようにかき立てられた、ミキちゃんの孤独な思い

イ 音楽によつて形づくられた、ミキちゃんの音楽への深い愛情

ウ 音楽に対抗して徐々に強くなっていくミキちゃんの深い悲しみ

エ 音楽を聴く喜びに胸が熱くなっているミキちゃんの感動

問五 線部⑤について、その説明として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア ささまざまな楽器が鳴り響いてどんな音が大きくなっていく様子

イ ささまざまな楽器が鳴つたり止んだりして互いに競つている様子

ウ 旋律がめまぐるしく入れ替わり音楽が紡ぎ出されていく様子

エ 大きな音同士がぶつかつて息苦しい不協和音を奏でている様子

問六 線部⑥について、その説明として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 激しい音楽に負けることなく自分の心を表現しようとするミキちゃんの思い

イ 音楽に共鳴して躍り出そうとする自分の心を冷静に見ているミキちゃんの思い

ウ 音楽によつて動かされることで、自覚されていくミキちゃんの言葉にならない思い

エ 音楽に圧倒されて音楽の持つ黒い力に飲み込まれるミキちゃんの思い

問七 線部⑦「指揮者の手がぐるりと輪を描いた」とは、何をあらわしているか、十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問八 線部⑧「神々しいようなミキちゃん」とはどのようなミキちゃんですか。解答らんにしたがって三十文字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問九 ※よりあとの本文の中で、言佐子がミキちゃんに強く共感している様子が最もよくあらわれている段落を探し、初めの五文字を答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問十 この文章の特徴として、適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 比喩を多用し、人物の心情や音楽の演奏について繊細に描かれている。

イ 感覚に働きかける表現をちりばめているが、特に視覚的表現が豊かである。

ウ 登場人物それぞれの視点から、それぞれの心情が重層的に描かれている。

エ 硬質な漢字の表現と柔らかいひらがなの表現を巧みに使い分けている。

オ 楽器一つひとつが生命力豊かに描かれ、演奏を大胆に表現している。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

心の美しさというものは特別にいい立るとかえってよそよそしい問題になって何か特殊の人々のみにある美点のように考えられてくる。美しい心のあらわれなどというものは、いつどこでどんなふうに見いだされるのか、全然きまりはないと思う。ちよつとした言葉のはしにも行為の中にも、ほのほのと心の温まる印象を与えるものがある。それは事の大小ではなくて——やっばり、美しい心持の発露なら何でも美しく眼にウツリ、耳に響くのである。

長い年月をアメリカで暮した一家が日本へ帰り住んでいるのを私は知っている。その家庭のおくさんが新しい土地で新しく日本の生活を始めているわけのだが、ある時、私にこう話した。

「ねえ、ミセス・ムラオカ、これは習慣のちがいでですから、いいとかわるいとかいうわけにはいきません、全く習慣だけの問題でしょうがね、こちらでは新しく越して来ると、越して来た家の方から隣近所へ挨拶にまわりますね。——以前なら引越してはまで配ったんでしようが——とにかくこつちから近所を廻つて、どうぞよろしく」といつてあるきますね。アメリカですと、新しく越して来た一家の近所の人たちから挨拶に来ます。往來で逢つたりしますと、先方のおくさんの方から、ああ、あなたは新しく越していらつしゃつたミセスNですね。私はお宅から三軒先の家の者です。あのう、お買物の店はすつかりお分かりですか？八百屋は御存じですか？肉屋は？何か御用がありましたら御えんりよなく、おつしゃつて下さい。」

まあ、こういう具合なんです。日本ですと隣の人はまだ挨拶に来ないから、外で逢つてもちよつと具合がわるいなんていつてますがね、その気持も分かりますよ、親切とか不親切とかいうのではなくて習慣なんです。こういう話を聞いて、N夫人と同じく「これはどつちがいいとかわるいとかのことではなくて、習慣のちがいであり、また国民性のちがいだと思つた。」

そうは思つたけれども、一つの疑問が私の心にのこつた。単に習慣のちがいだといつてそのままに片づけてしまつていいだろうか。少なくとも、今の時代になつては、人と人との交わりの面で、もつとやさしさや思いやりや美しさを發揮するようにツツめてもいいのだ。そのためには習慣をも変えていくぐらいの、積極的なものが必要なのだと、考えた。電車の中や乗合バスを待ち合わせる町のかど、すぐ自分の前にいる女の人の羽織のえりが折り返つていないのを見かけることがある。「あ、ちよつと、お羽織が……」といつて、えりを返してやるだけの親切をもしないことが多い。

不親切なのであるか？とんでもない、それどころか、「困つたな、あの人の羽織のえりが……」と気になつてしようがない。ただ一言「ちよつと、えりが」というのが何となくきまりがわるいのである。

こういう日本人のハニカミを、心の美しさとか美しくないこととかに結びつけて考えるのは無理だといふかもしれない。けれど、結局はハニカミに打ち勝つだけの「いたわり」が他人に対してあるかないかの問題ではないだろうか。心の美しさというものが端的に外に表れるのは没我的行為である。

没我的というと、大変に英雄らしくきこえるけれども、知らない人にはちよつとした心づくしをするのにも妙な自意識が先に立つてつい知らん顔をして通りすぎてしまふ。

こういう時に、我を忘れることができれば小さな親切ができる。そういつた状態もまた心の美しさであり、このようなくだわりのない生活の中に美しさがある。美しい生活は倫しい生活であり、心の美しさが表情のあたたかさを作る。昔のように、美貌の標準が眼元涼しく、口元しまり……といったようにきまつていた時代には鼻がひくいからとか、生えざわがわるいからとかいうことで、自分から卑下してしまつたかもしれないが、今ではいさゝかした表情の中に個性美が発見されるという考えかたが常識になつてきているのだから、心の美しさは美人の条件でもあるといえるのであろう。

(村岡花子「曲がり角のその先に」「美しさの要素」より)

【注】

- 発露 Ⅱ あらわれ
乗合バス Ⅱ 公共のバス
羽織 Ⅱ 和服の上着
端的に Ⅱ はつきりと
卑下 Ⅱ 自分をおとしめること

問一 —— 線部①・②の漢字を用いた熟語をそれぞれ次のくく線部の中から選び、記号で答えなさい。

- ア シヤジツ的な表現
イ 事件のスイイを追う
ウ 明るい性格をハンエイする

三

次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

種子について

人や鳥や獣たちが
柿の実を食べ、種を捨てる
——これは、おそらく「時」の計らい

種子が、かりに
味も香りも良い果肉のようであつたなら
② 貪欲な「現在」の舌を喜ばせ
果肉と共に食いつくされるだろう。
「時」は、それを避け
種子には好ましい味をつけなかつた。

固い種子——
「現在」の評判や関心から無視され
それ故、流行に迎合する必要もなく
己を守り
③ 「未来」への芽を
安全に内蔵している種子。

人間の歴史にも
同時代の味覚に合わない種子があつて
明日をひっそり担つていくことが多い。 (吉野弘「感傷旅行」より)

問一 —— 線部①について、「計らい」の具体的な内容をあらわしている部分を詩の中から抜き出し、その初めと終わりの五字を書きなさい。(記号・句読点も一字とする)
問二 —— 線部②「貪欲な「現在」の舌を喜ばせ(る)」とはどのような内容ですか。ほぼ同じ意味となつている部分を詩の中から十字以内で抜き出さない。(記号・句読点も一字とする)

問三 —— 線部③とはほぼ同じ内容となつている部分を詩の中から十五字以内で抜き出さない。(記号・句読点も一字とする)
問四 この詩には次のような副題がつけられています。

——「時」の海を泳ぐ稚魚のようにすらりとした柿の種

問五 この詩の内容と合っているのは次のうちのどれか、最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 何に対して価値を認めるのかというものは時代によって移り変わるが、そのような時代の流れに抵抗しようとするものを見つける必要がある。
イ 何に対して価値を認めるのかというものは時代によって移り変わるが、その時に流行していかないものに注目する必要がある。
ウ 何に対して価値を認めるのかというものは時代によって移り変わるが、流行は繰り返すので、古い考えについても見直す必要がある。
エ 何に対して価値を認めるのかというものは時代によって移り変わるが、多様な考え方があつたことに気がつける必要がある。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本語というのは不思議な言語です。例えば英語なら、「A、B」などのアルファベットだけ、または加えて数字が使われる程度でしょう。それでは、日本語の文章は何種類の文字によって成り立っているでしょうか。漢字・ひらがな・カタカナ・数字に加え、最近ローマ字やアルファベットによる略称、記号も多く用いられます。そうした種々雑多な文字の集合体を、ひとつの文章として整然と読んでいく能力が、日本語では必要なのです。

このように日本語の表記は多様性に富んでいます。元来は、漢字とかなを中心にあらわしていました。さらに歴史をさかのぼってゆけば、中国から伝えられた漢字が日本語表記の祖先となります。

漢字は今から三千年以上の昔、中国で生まれました。最初は物の形や様子などを絵のようにえがいてあらわしていましたが、それらが変化したり、組み合わせられたりして、新しい漢字が次々と作られました。その成り立ちを大きく四つに分けると、次のようになります。

(A) 文字Ⅱ目に見える物の形を、具体的にえがいたもの。 (B) 文字Ⅱ目に見えない事がらを、印や記号を使ってあらわしたもの。

(C) 文字Ⅱ漢字の意味を組み合わせたもの。 (D) 文字Ⅱ音をあらわす部分と意味をあらわす部分を組み合わせたもの。

こうした長い歴史を持つ漢字ですが、文字のない日本にそれが伝来してからは独自の歴史を歩み始めるようになります。

1 時代には、次のような表記の例が見られます。

「波名(「花」)・「比登(「人」)」

これらのように、漢字の意味は関係なく音のみ利用した表記を 2 と呼び、それまでの日本語を書きあらわすために漢字を工夫して用いた表記方法です。

3 時代になると、2 をくずして書いたものをさらに簡略化した 4 と、2 の字画の一部を取り出して形を整えた 5 が作られました。それらは、初めは一つの音をあらわすのいくつもの種類のものがありましたが、今では一種類に統一されています。

日本語の文章は、こうした表音文字のかなと 6 文字の漢字を交えて書きあらわす「7」という形式をとり、そのため視覚的に、すばやく、正しく意味を読み取ることができるといふ特徴をもつ個性的な言語なのです。

問一 (A)～(D)にはどのような言葉が入るか、それぞれ漢字で答えなさい。

問二 1～7にはどのような言葉が入るか、それぞれ適当な言葉を答えなさい。

問三 中国から伝わった言葉や文章のうちには、現在も生活の知恵や人生の教訓をあらわす短い表現として、よく引用される「故事成語」といふ言葉があります。次の

- ①～⑤のカタカナを漢字に直し、それぞれの意味として適当なものをあとから選び、記号で答えなさい。
- ① ハイスイの陣 ② タザンの石 ③ 大器バンセイ ④ 堂雪のコウ ⑤ 漁夫のり

ア 人のよくない言動でも、自分を向上させるのに役に立つこと。 イ 苦勞して学問をして、立派な人になること。
ウ 両者の争いに乗じて、第三者がもうけを横取りすること。 エ 人より遅れて、ゆつくりと大人物になること。
オ 失敗すればあとがない覚悟で全力を尽くすこと。

五 ①～⑦の慣用句について、() に示した意味となるように □ にあてはまる漢字をあとから選びなさい。ただし一字一回とします。

- ① □ に入る (することが身につけていて立派である)
- ② □ につく (あきていやになる)
- ③ □ を売る (むだな話などをしてなまける)
- ④ □ を折る (書くことを途中でやめる)
- ⑤ □ を注ぐ (全力を出してものごとにあたると)
- ⑥ □ を現す (才能が人より目立ってくる)
- ⑦ □ をともにする (力を合わせて生活や仕事をする)

楽 堂 心 頭 鼻 血 苦 角 油 筆

一

問一

問二

問三

問四

問七

問八

問九

問五

問六

問十

ミキちゃん

問十

二

問一

a

b

問二

問三

問四

問五

問一

問二

問三

問四

問五

三

問一

問二

問三

問四

初め

終わり

問五

四

問一

問二

問三

A

B

C

D

5 1

6 2

7 3

4

問三 漢字

①

②

③

④

⑤

意味

①

②

③

④

⑤

五

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦